S.S.S.　スクールスクールスクール

小生、鷲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓ．Ｓ．Ｓ．　スクールスクールスクール

【Ｎコード】
Ｎ４４９９Ｉ

【作者名】
小生、鷲

【あらすじ】
注：ラブコメではありません。ミステリー的ですのであしからず。
藍野李（すもも）は高校２年生のやる気なし男児。
新学期の初日、彼は謎の女の子から手紙をもらう。
それをラブレターだと信じ、記されていた待ち合わせの場所で会ったのは、李の命を狙う不良だった。
そして、その日以来彼の日常は非日常になった。

誤字脱字の指摘、感想、批判などよろしくお願いします。

新学期

あなたは全力で走ったことがあるだろうか。
あるとしたら体育祭の時かもしれない。
警察から逃げたことがある方もいるかもしれない。
だけど今僕が実感していることがある。それは一番早く走れるのは多分自分の身が危険にさらされているときだということだ。
この僕、藍野李（すもも）のように。
僕は今、全力で夕方の、薄暗くなってきた町の中を走っている。
なぜかって？
そりゃあ後ろからヤンキーが追いかけてくるからに決まってるじゃないか。
ナイフを手に「まてやコルァッァァァ！ぬしゃ△○X＊@！！」とか後半は多分ナメック語で叫びながら追ってくる。野蛮人って怖いわ。ナメック星に帰れ。もちろん声には出さないが。
だから、つかまったらヤバイ！ということで
この世に生を受けて今まで何事にも本気で取り組んだことが無かったこの僕が全力で走っている。
しかし、普段の行いが悪かったのか、というかアレだね。人体って正直だ。
僕は火事場の馬鹿力とか言う人体の神秘を体験してたんだが。
タバコとかやって肺活量のないナメックヤンキーどもなぞ敵ではない、はずだったが…
途中から足がもつれるという最悪なアクシデントに見舞われた。
たぶん、というか、普通に普段走ってないからだと思う。
あぁ・・・こんなことなら普段から走っとけば、と思うがもう遅い。
ふらついて、ついに右足と左足が絡み合って僕は転倒した。
顎、というか顔の側面を強く打った。
顎が外れたかもしれない。動かすと右のこめかみが変な音を立てて

いる。
遠くにヤンキーどもの笑い声が聞こえる。
「あ～・・・くそ・・・」
僕は情けなくて涙が出てきた。

僕がなぜナメックヤンキー（仮）に追いかけられているかというと、それにはもちろん訳がある。

今日の朝。
それは春休みがあけて、高2の新学期に突入したその日で、いかに僕のテンションが低かったかわかるとおもう。
うちの学校は私立で、2年からの転入も受け付けてるわけなんだけど、入ってきた新しいクラスメートを認識できないくらいテンションが低かった。
学生諸君ならよくわかってくれるよね。意外とそうでもないか。
しかし、休みが終わりテンションというか最早意識が天昇してるやつらも他にいるわけで、その中の一人、”いつも眼が死んでる””周りの空気が死んでる”と評判の佐久間久君が僕の少ない友達の一人。
僕は四限目が終わり、同時に昼休みが始まったわけだが、悪く言えば古い、よくいえば風情がある教室の最奥・真ん中に座っている僕の隣の机に突っ伏していた佐久間に話しかけた。
「おうい佐久間～」
と僕が声をかけると佐久間が顔を上げて「ふが？」と間抜けた声を上げた。
「春休みどうだったよ～。」
佐久間はしばらく眠そうにまぶたをぱちぱちさせていた。
「え？ああ。寝てたよ？。」
「・・・なぜに疑問系・・・てかお前寝る以外に何もやらないの？」
ぼけっとしている佐久間を半眼で見る。

「え？…ん～…敢えて言うなら…生活かな」
ニヤリと笑って言う佐久間にあきれて僕は「ガキか」と突っ込みを入れた。
そういえば昔、夏休みにこいつの家に3日連続で行くと常に寝ていた。
案外事実なのかもしれない。
「それよりもさ、2組の転校生知ってるかよ？」
2組。僕ら1組の隣の組だ。僕は佐久間が転校生について知っていることに少し驚いた。だって佐久間は普段俺よりも情報に疎いから。こいつが知ってるってことは結構な有名人なのだろう、その転校生とやらは。
僕が素直に知らないと告げると佐久間は続けた。
「すげー美人らしいんだよ。茶髪で二重で。」
「ほぉ～そーなのかー。」
僕はそういったことにあまり興味が無いので適当に聞き流すことにした。
「でさー、体もね、こう、控えめなんだよー。俺のちょうどストライクゾーンというか。」
「ふむ。」
全く。こいつは女を語りだすと饒舌になる。てか誰もお前の好みなんて聞きたくねぇ。
だから、適当に相槌を打ちながら今日の昼飯について考えていた。
焼きそばパンはもう売れてしまったのだろうか。
「それでさー、なんつーか、一目ぼれなのかな？こう、胸がキュンとね…」
さて、おそらくここから佐久間の妄想恋愛話が始まるのだろうから離脱せねばなるまい。
なにせ佐久間の話は長いし、非現実的だから。
前に一度聞いてやると、延々と聞かされ昼休みが終わった。
しかし佐久間のいったい何処からそんな妄想が出てくるのか不思議

でならない。
気持ち良さそうに話し続ける佐久間の元を俺はこそこそと逃げ出した。

昼休みが終わり、先生すら気の抜けた授業も終わり、放課後。
佐久間に授業中小声でずっと妄想話をされていてうんざりしていた
僕はさっさと帰ることにした。
「おい～、話聴けよ～」とほざく佐久間を尻目に僕は教室を抜け出し、下駄箱に向かった。
あぁ、自由ー素晴らしいね。
僕は優雅に下駄箱から自分の靴を手に取った。
そして優雅に靴を履き終えたところで、声をかけられた。ソプラノの女の声。
「あの、李先輩ですか？」
声をしたほうを見ると、そこには見慣れない女子生徒がいた。
セーラー服の襟が緑、つまり1年のはずだ。
今日入学。見覚えがなくて当然。
「えっと…うん、そうだけど。何か用かな？」
僕はなるだけ穏やかにその子に告げた。内心どきどきだ。顔に出ていたかもしれない。
だって女の子だぜ？
すると、その子はいきなり僕に向かって両手を突き出した。
驚いてその手を見ると、紙が握られている。
「ッ・・・」
その子は紅い顔をしていて、僕にその紙を押し付けると下駄箱から逃げてしまった。
唖然としていた僕だったけど、僕らのやり取りを見ていたほかの生徒たちの痛い視線でわれに返ると、押し付けられたが下に落ちた紙を拾って、あわててグラウンドに出た。
そういえば昔変態名人と名高い同級生の岡部君が視線は凶器ぢゃ！

とか言っていたけど、真実だね。しかし変態名人は何の名人なんだろうか。形容詞だよね変態。
さておき、うちの学校は校舎と校門の間にグラウンドがある。
僕は校門までグラウンドを突き抜けて走って、校門を出たところで僕はその問題の紙を良く見てみた。
ファンシーなメモ帳の１ページのようだ。４ッ折になっている。
僕はその紙を開いた。心拍数が上がるのは、女の子からのラブレターかもと期待していたから当然だ。君もラブレターもらったときはどきどきするよね。何、もらったことがない？僕もだ。
さて、その紙にはこう記されていた。

「先輩
今日４時に久方商店街のＭＩＴＯＲＩ電家の前で待っています。
絶対着てください。
なつきより」

僕の時代…？！僕の時代が来たのか？！と心の中で叫んで腕時計を見ると４時まであと１５分しかないことに気がついた。
無茶だ・・・隣町の久方まで１５分でいけるはずがねぇ・・・てかあの子なつきって言うのかなぁ・・・
とおもいつつ、僕は急いで通学用に校門の自転車駐輪場に置いてあった自転車に乗ると久方の新しい商店街、通称久方商店街に急いだ…
…で、そのＭＩＴＯＲＩ電家についた直後に
「…お前がすももか？」
とヤンキー数人に声をかけられ、恐る恐るはいと思い切り答えたら殴られた。痛かったのは言うまでも無い。乗っていた自転車のホイールが折れ曲がった。そして、相手がナイフを取り出すのを見た僕は自転車を捨てて走って逃げ出したのだ。そこにあの女の子はいな

かった。
「くそ、何でだ?!俺なんか悪いことしたのか?!」
そうつぶやくとヤンキーたちが追いつく前に、僕は立ち上がって再び走り出した。
だけど右足の足首をぐねってしまったみたいでうまく走れない。
「くそっ、くそっ…」
このままではヤンキーに追いつかれ、殺されるのは時間の問題だろう。
僕の心を暗いモノが襲った。
このままではだめだ。
僕は警察に通報することに決めた。
痛む足を引きずって目立たない物陰に隠れ、携帯を取り出すと警察に電話した。
しかし、電話の相手は求めていた警察ではなかった。だけどテンパっていた僕はそれに
気づかなかったんだ。
「ハイ此方学生闘争管理特別警察大坂府〜。何か用か。」
「ひ、久方商店街で不良に襲われています!助けてください!」
あせりと恐怖で声が裏返った。携帯を握る手が汗ばむ。
「あぁん?不良だと?それぐらい撃退できんのか・・・まぁいい、お前の担当にまわすぞ。」
え?と思っていると耳元でプツ、と音がして今度は別の声がした。
「あい、担当の御手洗文だよ。どうかした?」
「で、ですから久方商店街で…」
僕は繰り返そうとしたが、その先はいえなかった。なぜなら不良たちに見つかってしまったからだ。
横腹を蹴られてむせながら暗い路地に倒れこむ。
更にふとももをナイフで刺された。だが、傷は浅い。
いやだ、死にたくない。
歯を食いしばって僕は不良を蹴飛ばし、四つんばいになり、逃げる。

「うおっ！」と声が上がるが気にしている場合ではない。
「警察に通報かよ？はは、つくころにはお前死んでるし、ハハハハ！」
後ろで不良たちが僕をあざ笑った
絶望的状況。
這って逃げる僕。
嗤いながら追いかけてくる不良。
打開策は、僕には、無かった。

◆

…ねぇ…いつまで逃げるの？いつまで苦しむの？
「ふっ…ふっ…」
あきらめなよ。どうせ助からない。さっき刺されてわかったろ？向こうは殺す気なんだよ。
「はぁ…はぁ・・」
後ろからヤンキーたちが来てるんだぜ？足刺されてたのに逃げるのは無理だろう？
なぁ、ヤンキーにつかまれとは言わないから楽になればいいんじゃないのか？どうせ死ぬんだしさ。この路地裏で死ねば誰にも迷惑ないしね。
「ぐっ…」
ホラァ肋骨あたり折れてるんじゃないのぉ？走っても苦しんで、それで結果は同じだぜ？
あ、またこけた。
「逃げてんじゃねぇぞカス！さっさと殺されろ！俺たちはお前殺さないといけねーンだよ！」
あー。ヤンキーたちもやっと追い付いてきたねぇ。しっかし足遅いな、あのカスども。煙草やったらダメっていうあれだよね、体現。
息切れてるしさぁ。

でもねぇ、こっちも足首怪しいし無理だよネこれ以上逃げるの。いままで本気で何もしてこなかったのによくやったよ！だからもういいじゃん？

「う…」

まだ立つのかよ。

「くっ…ぅ…ふ…ひ」

あー情けない。泣くなよ。泣いて生き恥をさらすくらいなら受け入れろよ、死をさぁ。

楽になれるぜ？死んだら。

自殺。そうさ、そうしよう、それがいい。

ほら、そこの非常階段を上って飛び下りればすぐだよ。

死ねるさ。

「…い…だ」

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ…

「…いやだ…」

…？僕は何を言っているのかな？あぁ、幻聴か。死が近いと、ねさぁ、

楽になろう、

楽になろうぜ。

いやだ、死にたくない。

まだ死なない！
「死ぬか畜生ぉぉぉぉぉぉ！」
心の中の絶叫。
いくらやる気が無くったって、生きる希望もテストの点数も財布の中身もなくったって、変態名人岡部君と知り合いだからって死んでたまるかよ。
まだやり残してることがたくさんあるんだ。
佐久間に借りたＤＶＤ見てないし、ＴＳＵ○ＡＹＡのＤＶＤ返却してないし、安売りしてたビデオ買ってみてねぇし、写真部にお願いしてたあこがれの先輩の写真も受け取ってねぇんだよぉ！
何より、
「こんなくそどもに俺の楽しみを奪われてたまるかってんだ…」
ふと、
むかし、うちの家系で唯一まともだったジジイが言っていたことを思い出した。
そんなジジイとよく実家の縁側で囲碁を打っていたけど、常に負けていた僕に彼はやさしく言ったんだ。
「いいかね李。勝負で肝心なのは何かわかるか？」
そのころ僕は９才。深く考えずに言った。
「力とか？あ、運じゃない！？運が良ければ…」
するとジジイはふ、と微笑み、僕の頭の上に手を載せると諭すように告げた。
「李。運に勝負を任せてはいけないよ。運は、とっておきのぶきなんだよ。いつも使えるわけじゃない。だから、勝つためには日々の地道な努力と判断力、そして…
「「根性！」」
頬を張って気合を入れる。もう死のうという声は聞こえない。涙もない。

だが、
不良たちは後ろに迫っている。
背水の陣。
携帯はないが、警察には言った。多分、伝わってるはずだ。
だから、
これはゲームだ。僕は思った。僕が警察と会ってクリアか、不良に殺されてゲームオーバー。
十中八九先に殺されるリトライなしの超難の難易度だが、やるしかない。
しかも、クリアにはその”運”が欠かせない。
だけど、だからこそ僕は、覚悟を決めた。
さて、いくぞ。もう、不良は近くにいる。
「南無三！」
気合とテンションに任せ叫ぶ。

走れ！

僕の細い足が暗い路地の地面を強く蹴った。間一髪ですぐ後ろに迫っていた不良のナイフが空を切る。

走れ！

血が流れていたが傷の浅かったふとももからさらに多くの血が噴き出す。だけど僕はそのふとももを振り上げて路地裏のじめっとした臭い空気を切り分けて進む。

走れ！

右足で地面をけるたびに足首が悲鳴を上げる。脂汗が浮かぶけど僕は気にせずに暗い、死の雰囲気を切り裂く。

走れ！走れ！走れ！

もう、考えることはなかった。

◆

しかし、限界は急に来た。

がくん、と左膝が動作を停止する。あ。こける僕。顔面から舗装されていないじめんに倒れこむ。

驚愕と絶望の入り混じった、混沌とした思考のなかで僕は思う。何故、と。

しかし、それはすぐに分かった。

血が…

流れていた。ふとももから。

出血による痺れが急に来る。体が動かなくなる。否、動けなくなった。

これまでか…

やはり、根性でもどうにもならないものはどうにもならないのか。

１００メートルほど先の大通りの光がまぶしい。

あと、あと１００ｍなのに…ッ！！

だが動けない。

走って、あんなに引き離した不良たちが息を切らしながらこちらへ来る。

振り切って時間を稼げなかった。

僕までたどり着くのにそう時間はかからないはずだ。

あぁ、最早これまでか。悔しいなぁ。

そう僕が思い、絶望に打ちひしがれたその時。

上から凛々しい声がした。

「李君。学生闘争管理特別警察、君の担当の御手洗文だよ。どうか

した？」
聞いた瞬間、
勝った。生き残れた。うれしくて、それゆえその人が言った内容は
「警察」の部分しか聞き取れなかった、否聞きとらなかった。
命取り。反省。あとで、後悔することになるが。
ともかく、僕はその大通りを背に立つ女の人の方に顔をあげてこう
いった。きっと泥だらけだったと思う。
「助けてください！」
見上げた人影は気のせいか、後光が指しているように見えた。
本当はただの大通りの光が暗い路地に差し込んでいるだけなのだけ
れど。
現実は厳しい

だけど僕は現実よか幻想で十分だ。

「うん。わかった。」
女神が僕にほほ笑んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4499i/

S.S.S.　スクールスクールスクール

2011年1月14日03時27分発行